

明治17年（一八八四）京都の陶工の家に生まれた田中作太郎は、後に穂山と号した。

大正2年（一九一三）29歳の時、三井物産の委託を受けシンガポールに渡り、ゴム採取用の陶製カップ製作の傍ら、作陶活動を続けた。この地で10年を過ごし、帰国して東京多摩川に石炭を燃料とした矢口窯を築き、茶陶器の制作をした。

昭和2年（一九二七）帝展（現在の日展の前身）に工芸部門が新たに加わり、この時の審査員板矢波山は、関東地方の陶芸家を集め、東陶会を結成これを主宰、この時穂山は創立会員となった。

昭和13年（一九三八）には中国に渡り主に華北地方を踏査、中国古窯の研究をした。この地方はどここの窯も燃料は石炭であったという。

同年、中国から帰り矢口窯で作陶活動を続けていたが、太平洋戦争末期信楽へ疎開、ここで薪窯を築き作陶した。

昭和20年（一九四五）終戦を迎え、燃料に困難を極めていた穂山のことを知った大多喜天然ガスの久留島社長は、天然ガスで作陶する様にと穂山を誘い、昭和22年（一九四七）穂山は会社構内に天然ガスの窯を築き作陶活動を始めた。社長と穂山は同郷の人、家も近く幼い時から深い絆で結ばれていたのであった。

東京目白の椿山荘が開店する時、穂山は椿山荘の食器を請負いこれを納めている。機械作りの陶器ではなく、一品一品ろくろを回し、各種食器を作っていく、穂山の作は中央ホテルで使われていた。

穂山は、ガス窯について次の様に回想していた。



「天然ガスはカロリーが高く、窯の温度は千三百度にも達する。それに薪と違って何日も寝ずに火加減をみる必要

がない。求める温度を設定すれば窯の側に付いていなくてもよく、体を休めることができよう」と。

昭和37年、茂原小学校前にあった市の公民館で、市教育委員会主催の市内小中学校図工主任等の陶芸実技研修会が開かれた。講師は田中穂山先生、その時使われた陶土は、鴨川市西條で穂山が発見したものであった。



▲田中穂山氏の作品

茂原の大多喜天然ガス会社（現、関東天然瓦斯開発株式会社）構内に、日本でいち早く天然ガスの窯を築き、長生窯茂原焼の陶芸活動を続けた田中穂山は、昭和39年（一九六四）茂原において80歳の生涯を閉じた。墓所は郷里京都東山の地藏山墓地にある。

茂原市文化財審議会委員

佐藤 信夫

文芸コーナー

ともしび

金網あき子

あたりが暮れ色に  
染まる頃あちらに一灯  
こちらに一灯  
ぽつりぽつりと  
窓を染める温かい  
灯がともる

影絵のように  
小さな影や  
大きな影が  
ほのぼのと窓辺に映る  
平和な家族の  
映像です

ここにいのちのいることを  
窓のあたりが告げている  
幸せですよと  
告げている・・・

◎選評 斎藤正敏

日が暮れて、家々の窓に灯がともる。窓の灯を平和な家族の映像と捉える作者の心根を思います。生きることは結構大変なことですが、窓の灯は幸せを告げているのです。

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。

●投稿は楷書をお願いします。

※俳句、短歌、川柳の原稿送付先

〒297-8511 茂原市道表1番地 茂原市役所秘書広報課宛「文芸コーナー」と朱書きしてください。